

日本動物考古学会 第2回大会 プログラム・抄録集



2014年

11/29(土)・30(日)

福井県立三方青年の家・若狭三方縄文博物館

日本動物考古学会第2回大会

2014年11月29日(土) 福井県立三方青年の家
30日(日) 若狭三方縄文博物館

プログラム・抄録集

日本動物考古学会(編)

The 2nd Annual Meeting of the Japanese Society for Zooarchaeology

Dates : November 29 and 30, 2014

Venue : Fukui Prefectural Mikata Youth Center
Wakasa Mikata Jomon Museum

Program & Abstracts

Edited by the Japanese Society for Zooarchaeology

実行委員長 : 小島 秀彰 (若狭三方縄文博物館)

Chairman of the Executive Committee : Hideaki Kojima (Wakasa Mikata Jomon Museum)

目 次

ごあいさつ	1
歴史遺産と自然のまち 若狭町へようこそ	2
日本動物考古学会第2回大会に寄せて	3
日本動物考古学会第2回大会にご参集の皆様へ	4
大会組織委員会名簿	5
スケジュール	6
大会参加費・懇親会費	6
会場と交通アクセス	7
発表者の方へ	9
抄録集 □演 A	10
□演 B	12
□演 C	14
□演 D	16
ポスター発表	18
『動物考古学』32号 原稿募集に関するお知らせ	23

ごあいさつ

日本動物考古学会第2回大会にご参会くださり、ありがとうございます。今回は若狭町ならびに福井県里山里海湖研究所のご協力を得て、若狭三方縄文博物館で大会を開催させていただくこととなりました。

若狭町には、縄文時代の遺跡として著名な鳥浜貝塚があります。鳥浜貝塚は川辺に形成された貝塚で、動物遺体や植物遺体が多量に出土しました。私も発掘当時に何度か訪れて、シカやイノシシの骨を見せていただき、それらの保存状態がよいことに感心しました。それ以上に、ヒョウタンやドングリ類などの植物遺体が豊富なことに驚きました。ウルシ製品や丸木舟も多く出土し、それまで乏しかった縄文文化のイメージを一変させるものでした。その当時は問題となったマメ類の栽培も現在では当然のこととして縄文文化の一要素となっています。このように、鳥浜貝塚は縄文文化を考える上で欠かせない遺跡です。

その鳥浜貝塚も抱える土地柄にも鑑み、今回の大会では、縄文時代の生活に関する新知見も多数発表されることを期待しています。

末文ながら、本大会の開催に向けご尽力賜った若狭三方縄文博物館の永江様や小島様をはじめ関係者の皆様に厚く感謝申し上げます、ご挨拶といたします。

日本動物考古学会
会長 西本 豊弘

歴史遺産と自然のまち 若狭町へようこそ

若狭町長として、日本動物考古学会第2回研究大会にご参集の皆様を、心より歓迎いたします。若狭町で本大会が開催されますこと、誠に光栄なものと存じます。

若狭町は、平成17年3月31日に誕生し、本年度で町制10周年を迎えます。リアス式海岸の若狭湾、7万年の水月湖年縞をもつラムサール条約湿地・三方五湖、近畿一の清流・北川といった自然豊かな環境下で、古来、鳥浜貝塚、若狭の首長墓群、鯖街道の宿場町である熊川宿など、日本を代表する歴史遺産が育まれてきました。中でも縄文時代の鳥浜貝塚は、かつて小学校社会科の教科書に掲載された程、著名な貝塚遺跡です。

その鳥浜貝塚の研究から派生した最新の成果に、土器に付いた炭化物をバイオマーカーとして使う研究と、水月湖年縞の研究があります。前者は縄文草創期の鳥浜貝塚の土器が、サケなどの水産物を煮炊きした世界最古の痕跡を持つことを教えてくれました。後者は、地質学的年代の世界標準となる基礎データを提供してくれました。ともに、世界的な情報発信となる素晴らしい研究成果です。

また本年7月には、福井県敦賀市と京都府舞鶴市とを結ぶ舞鶴若狭自動車道も全通し、若狭町は縄文時代以来続く、各方面との交流をさらに促進できるようになりました。今後も、引き続き各方面への情報発信や文化交流に努めていきたいと考えております。

平成18年3月に制定された若狭町環境宣言には、「縄文の時代から続くこの貴い自然の恵みの中で、私たちは森羅万象すべての生き物とともに暮らし、互いに調和し生命を育んできました」との一文があります。動物考古学の研究対象である「森羅万象すべての生き物」とともに暮らす若狭町の環境は、現代においても「共生」と「循環」のメッセージを私たちに届けてくれます。

本研究大会にご参集の皆様には、ぜひとも若狭町の歴史遺産と自然を満喫していただき、縄文人たちが鳥浜貝塚をこの地につくった理由について、思いを馳せていただけましたら幸いです。

最後になりましたが、本大会にご参集の皆様の益々のご発展を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

福井県 若狭町長
森下 裕

日本動物考古学会第2回大会に寄せて

このたび、日本動物考古学会第2回大会が福井県若狭町で盛大に開催されますこと、心よりお祝いを申し上げます。

また、人間と動物の関わりあいの歴史を探る研究を深め、人間社会の歴史の究明に寄与されてきました貴学会の皆様の研究活動に対し、心から敬意を表します。「日本動物考古学会」として東京都以外での初めての大会開催地に本県を選んでいただき、誠に光栄に存じます。

今大会に全国からご来県された皆様の研究交流が図られることにより、動物考古学に関する研究が一層発展されることを願っています。

さて、本県では、古くから農業を中心とした人々のごく普通の暮らしの中で、様々な自然環境や伝統文化、国土、風土などが育まれてきました。また、現在では、三方五湖の自然再生や越前市白山地区のコウノトリを呼び戻す運動など、住民活動も極めて活発に行われています。

県は、昨年本県で開催された SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ (IPSI) 第4回定例会合の成果を引き継ぐため、昨年10月にラムサール条約登録湿地である三方五湖湖畔に福井県里山里海湖研究所を設立いたしました。

当研究所は、生物、生活、景観の三つの多様性を柱に、自然との共生を目指す実学研究の拠点として、本県の里山里海湖の魅力を再発見できる研究や活動を展開しています。

研究テーマの一つとして、三方五湖の一つ水月湖の湖底から採取した「年縞」を基に、過去の気候と人の暮らしの関わりを解明することとしており、この分野においては、皆様の研究活動とも関連が深いものであるのではないかと考えています。

最後になりましたが、貴学会の皆様を心より歓迎申し上げますとともに、益々のご発展を祈念申し上げ、ご挨拶いたします。

福井県里山里海湖研究所事務局長
(福井県安全環境部企画幹)
野坂 雄二

日本動物考古学会第 2 回大会にご参集の皆様へ

昭和 37 年(1962 年)に最初の発掘調査が行われた鳥浜貝塚は、本年で発掘 52 周年を迎えます。このたび、その鳥浜貝塚に程近い福井県立三方青年の家並びに若狭三方縄文博物館で日本動物考古学会が盛大に開催されることは、大きな喜びです。ご参集の皆様を心より歓迎いたします。

鳥浜貝塚の調査史を振り返ると、そこには日本における動物考古学的研究の歴史だけではなく、低地性貝塚の調査史そのものが凝集されているように感じます。発掘調査に従事された方々のうち、既に第一線から退かれた方々もおられますが、発掘調査当時に学生だった方々は、今なお考古学に限定されない各研究分野で活躍されています。鳥浜貝塚は新分野を切り拓く若き研究者たちにとって、登竜門だったのではないかと、後進の身ながら感じずにはられません。

鳥浜貝塚の調査後、そのノウハウを活かしたであろう低地性貝塚の調査が次々に行われています。鳥浜貝塚で初めて出土した資料や、当時日本最古と言われた資料は、「後進」の遺跡の発掘調査成果によって次々と類例が蓄積し、その地位を譲っていきました。それは日本の低地性貝塚の調査・研究が正に成熟してきた証でもあるのでしょう。

では、鳥浜貝塚は既に学史の遺跡になったのでしょうか。日々、鳥浜貝塚の発掘調査成果を来館者の皆様にお伝えしている身としては、鳥浜貝塚は今なお、第一線の遺跡であると宣言したいと考えています。本研究大会にご参集の皆様には、ぜひとも鳥浜貝塚のエッセンスに触れて頂き、その研究成果から何らかの示唆を得て頂くことを、期待してやみません。

最後になりましたが、日本動物考古学会第 2 回研究大会の開催にあたり、ご協力いただきました関係各位に心より厚くお礼申し上げます。

大会実行委員長
小島 秀彰(若狭三方縄文博物館)

日本動物考古学会第2回研究大会 大会組織委員会名簿

会長 西本 豊弘 (伊達市噴火湾文化研究所)

大会実行委員

実行委員長 小島 秀彰 (若狭三方縄文博物館)

実行委員 永江 寿夫 (若狭町歴史文化課)

実行委員 青池 晴彦 (若狭町歴史文化課)

実行委員 野坂 雄二 (福井県里山里海湖研究所)

実行委員 吉田 浩樹 (福井県里山里海湖研究所)

実行委員 北川 淳子 (福井県里山里海湖研究所)

実行委員 坂川 和也 (福井県里山里海湖研究所)

大会事務局

事務局長 吉永 亜紀子 (慶應義塾大学)

事務局員 植月 学 (山梨県立博物館)

事務局員 佐藤 孝雄 (慶應義塾大学)

事務局員 樋泉 岳二 (早稲田大学)

事務局員 新美 倫子 (名古屋大学)

事務局員 本郷 一美 (総合研究大学院大学)

事務局員 山崎 健 (奈良文化財研究所)

事務局員 山根 洋子 (港区立港郷土資料館)

スケジュール

■29日(土) 会場：福井県立三方青年の家

- 11:00-11:50 役員会会議
- 12:15- 開場・受付
- 13:00-13:10 開会の辞
- 13:10-14:10 研究発表 A
- 14:10-15:10 ポスターセッション
- 15:10-16:30 研究発表 B
- 16:30-16:40 休憩
- 16:40-17:40 総会
- 17:40-17:50 記念撮影
- 18:30-20:30 懇親会

■ 30日(日) 会場：若狭三方縄文博物館

- 09:00-10:20 研究発表 C
- 10:20-10:30 休憩
- 10:30-11:50 研究発表 D
- 11:50-11:55 閉会の辞
- 11:55-12:45 若狭三方縄文博物館見学会
- 13:15-14:15 鳥浜貝塚見学会

大会参加費・懇親会費

大会参加費	2,000円（含む抄録集および茶菓代）
懇親会費	5,000円

会場と交通アクセス

大会・総会会場

福井県立三方青年の家 〒919-1331 福井県三方上中郡若狭町鳥浜 122-27-1
TEL : 0770-45-0229, URL : <http://www.pref.fukui.jp/doc/mikata-seinen>
若狭三方縄文博物館 〒919-1331 福井県三方上中郡若狭町鳥浜 122-12-1
TEL : 0770-45-2270, URL : <http://www.town.fukui-wakasa.lg.jp>

懇親会場

はまと旅館
〒919-1454 福井県三方上中郡
若狭町遊子 10-5
TEL : 0770-47-1724,
URL : <http://www.hamato.net>



大会・総会会場へのアクセス

舞鶴若狭自動車道若狭三方 IC から 車で約 5 分
JR 小浜線三方駅から タクシーで約 5 分 / バスで約 13 分 / 徒歩で約 20 分
自転車で約 10 分 (三方駅にレンタサイクル有)



JR 小浜線時刻表

	①	②	③											
敦賀駅発	6:24	7:43	8:15	10:44	12:20	13:13	14:20	15:47	16:45	17:46	18:41	20:10	21:08	22:04
美浜駅	6:51	8:04	8:37	11:05	12:41	13:36	14:42	16:09	17:11	18:11	19:03	20:31	21:32	22:30
三方駅	7:01	8:13	8:45	11:14	12:49	13:44	14:50	16:17	17:19	18:20	19:11	20:40	21:40	22:39

	④	⑤	⑥												
三方駅発	6:11	6:42	7:18	8:27	8:59	10:30	12:32	13:27	15:04	16:00	16:56	18:02	19:26	20:19	21:54
美浜駅	6:19	6:52	7:35	8:37	9:07	10:39	12:42	13:36	15:12	16:10	17:06	18:11	19:35	20:31	22:02
敦賀駅	6:44	7:13	8:03	8:58	9:30	11:03	13:05	13:58	15:34	16:33	17:28	18:32	19:56	20:53	22:26

動物考古学会スケジュールに合致する時刻

- ①三方駅発12:00のバスに接続。
- ②三方駅発タクシー利用の場合（三方青年の家まで約5分）。
- ③懇親会（はまと旅館）直行の場合（三方駅発18:22のバスに接続）。
- ④遊子（はまと旅館）発7:34のバスに接続。
- ⑤縄文ロマンパーク発13:54のバスに接続。
- ⑥縄文ロマンパーク発15:44のバスに接続。

バス時刻表

三方駅⇒縄文ロマンパーク

	①	②				
	月・水・金・日・祝	毎日運行	毎日運行	毎日運行	毎日運行	毎日運行
三方駅	10:50	12:00	15:10	16:40	18:22	
三方中学校	10:55	12:05	15:15	16:45	18:27	
三方庁舎前	11:00	12:10	15:20	16:50	18:32	
鳥浜口	11:01	12:11	15:21	16:51	18:33	
鳥浜	11:02	12:12	15:22	16:52	18:34	
縄文ロマンパーク	11:03	12:13	15:23	16:53	18:35	
						最終

※最終便は、懇親会会場のある遊子（ゆうし）バス停に、18:54着。

縄文ロマンパーク⇒三方駅

	③	④	⑤			
	月・水・金・日・祝	毎日運行	毎日運行	毎日運行	毎日運行	毎日運行
遊子（民宿はまと）	9:42	7:34	13:37	15:27	16:52	18:31
海山	9:46	7:38	13:41	15:31	16:56	18:35
縄文ロマンパーク	9:59	7:51	13:54	15:44	17:09	18:48
鳥浜	10:01	7:53	13:56	15:46	17:11	18:50
鳥浜口	10:02	7:54	13:57	15:47	17:12	18:51
三方庁舎前	10:03	7:55	13:58	15:48	17:13	18:52
三方中学校	10:08	8:00	↓	↓	↓	↓
三方駅	10:12	8:04	14:02	15:52	17:17	18:56
						最終

動物考古学会スケジュールに合致する時刻

- ①三方駅着11:14のJR小浜線に接続。
- ②懇親会（民宿はまと）に直行の場合。
- ③民宿はまとを朝一番で出発（三方駅発8:27のJR小浜線に接続）。
- ④鳥浜貝塚見学会終了前後に出発（三方駅発15:04のJR小浜線に接続）
- ⑤三方駅発16:00のJR小浜線に接続。

発表者の方へ

1. 口頭発表

■発表の準備

会場には、次発表者席をご用意いたします。発表開始 10 分前までにご着席ください。

■発表時間

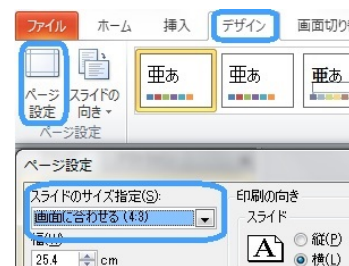
一件当たり 20 分を割当てさせていただいておりますが、内訳は発表時間 15 分、質疑応答 5 分とお考えください。13 分経過（ベル 1 回）、15 分経過（ベル 2 回）、20 分経過（ベル 3 回）をお知らせします。大会を円滑に運営できるよう、時間の厳守にご協力ください。

■データの保存と PC の接続

会場備え付けの PC(OS:Windows7.0)を使用されます方は、事務局員の指示に従い、事前に PPT ファイルを同デスクトップ上に保存していただきますようお願いいたします。ご自身で持参されました PC を使用されます場合は、各自接続してください。

■PowerPoint の画面設定

会場モニターへの画像投影比は「4:3」に設定されております。Microsoft PowerPoint をスクリーンに投影される予定の方は、【デザイン】→【ページ設定】→【スライドのサイズ指定】をご覧の上、【画面に合わせる (4:3)】が選ばれていることをご確認下さい（右記画像の青線部）。



この設定になっていない場合（【画面に合わせる (16:9)】など）は、画像の横幅が縮んで表示されたり文字列の配置が崩れたりすることもありますので、ご承知置きください。

なお、上記メニュー名はいずれも Office2010・2007 の場合です。

2. ポスター発表

ご自身の演題番号が記されておりますボードにポスターを掲示してください。ポスターの掲示と取り外しはご自身でお願いいたします。なお、大会終了後も掲示されたままのポスターにつきましては、処分させていただくこととなりますので、ご注意ください。

3. 配布資料

配布資料を用意されました方は、会場入口脇のテーブルに置いていただいても結構です。なお、コピーのご要望には一切応じかねますので、ご了承ください。

AO1 青森県尻労安部洞窟における縄文時代中・後期の動物利用

○澤浦亮平（東北大），澤田純明（聖マリ医大），江田真毅（北大），吉永亜紀子（慶大），黒住耐二（千葉県博），佐藤孝雄（慶大）

Animal resource utilization from the Middle to Late Jomon period at the Shitsukari-Abe cave, Aomori Prefecture

Ryohei SAWAURA, Junmei SAWADA, Masaki EDA, Akiko YOSHINAGA, Taiji KUROZUMI, Takao SATO

尻労安部洞窟は国内有数の石灰岩地帯たる下北半島北部に位置する。2001 年より発掘調査が継続されている当洞窟は、旧石器と更新世動物化石の明確な共伴が確認されたことで注目を集めてもいる。もともと、当洞窟からは更新世のみならず縄文時代中期後葉から後期前葉に比定される層準からも多数の動物遺体が出土し、最小 2mm 目までの篩を用いて微細資料に至るまで採集が図られている。これまで下北半島の縄文遺跡群に定量的な検討に耐え得る出土遺体群が僅少であった状況下、同資料は高い学術価値をもつ。幸い、筆者らは先頃 2012 年度までの出土資料(総計 7598 点)の同定・観察を終え、以下の事実を確認した。(1)森林性の丘陵から岩礁性の海岸に至る遷移帯に生息域をもつ多様な動物種の遺体を含む。(2)陸獣遺体には、シカ、カモシカ、イノシシなどの大型獣以上に、ウサギ、ムササビに多くの資料を見出せる。一方、海獣遺体については、アシカ科の遺体も含め、微々たる量を確認し得るに過ぎない。(3)鳥類遺体の主体は、スズメ目、ミズナギドリ科、ウミスズメ科、ウ科の資料が占める。(4)魚類遺体については、タイ科、フサカサゴ科、アイナメ科など岩礁性種の遺体に特徴づけられる。(5)貝類遺体についてもムラサキインコ、タマキビ類が主体を占め、岩礁生息種以外の資料は殆ど含まれない。本発表では上記の内容を踏まえ、本州北端における縄文時代人の動物資源利用を考察する。

AO2 縄文時代中期・後期の東京湾東岸域におけるハマグリ資源管理の多様性

—都川・村田川貝塚群におけるハマグリのサイズ分布解析から—

○樋泉岳二（早大），西野雅人（千葉市理文）

Diversity in the resource management of *Meretrix lusoria* in the Middle - Late Jomon shell middens on the east coast of Tokyo Bay

Takeji TOIZUMI, Masato NISHINO

東京湾東岸(現千葉市域)の都川・村田川流域では、縄文時代中期～後期にハマグリとイボキサゴを主体とする大規模貝塚が数多く形成される。ここでは、これらの貝塚群から出土したハマグリのサイズ分布をもとに、ハマグリ資源の管理状況について検討した。大型貝塚が発達する縄文中期中葉には、都川・村田川流域のいずれの貝塚においても殻長 35~40mm 以下の未成熟個体が過半を占めており、成熟個体は少なく、過剰捕獲による資源の枯渇傾向が明確である。これは、同時代の東京湾西岸の中里貝塚において未成熟個体の捕獲がきわめて厳格に規制され、資源の保全が図られているのとは対照的である。これに対して縄文後期になると、都川流域の貝塚では殻長 35mm 以下の個体が減少し、成熟個体が増加する。これは、未成熟個体の捕獲制限による資源状況の回復傾向を示しているものと考えられ、同流域の集落群がハマグリ資源の保全に向けた共有のルールを確立していたことを示唆する。一方、村田川流域の貝塚では、中期の大型貝塚が消滅する中期後葉～後期初頭にいったんサイズが回復するものの、大型貝塚が復活する後期前葉には再び未成熟個体が増加して、縄文中期と類似の状況に逆行したと推定される。このように、都川・村田川流域という狭い範囲内にあっても、ハマグリの資源管理にかかわる意識と対処法は時代的・地域的に多様なものであったことが明らかとなった。

A03 佐賀市東名遺跡群出土の耳石の種同定と、その動物考古学的意義について

○松井章（奈文研），大江文雄（奈文研），丸山真史（京都市埋文），西田巖（佐賀市教委），
真貝理香（奈文研）

Investigation of fish-otoliths from the Higashimyo Wetland sites, Saga City, and its archaeological significance

Akira MATSUI , Fumio OHE, Masashi MARUYAMA , Iwao NISHIDA, Rika SHINKAI

耳石群集の同定：縄文時代早期末の湿地性貝塚として、極めて良好な状態で動植物遺体を保存する東名遺跡の第1貝塚(17区～22区)並びに第2貝塚(4区～9区)の貝層を1mmの篩で選別したところ、耳石試料1046点を得ることができ、その種同定を実施したところ、海生魚種12科15属16種を同定できた。その魚種はスズキ科スズキ(45.3%)、ニベ科ホンニベ(9.0%)・コイチ(10.1%)・シログチ(0.9%)、ボラ科メナダ(8.9%)、ボラ(8.3%)、タイ科クロダイ(7.9%)、ハモ科ハモ(0.8%)、その他魚種0.2%以下で、そこにはハゼ2種、シロキス、テンジクダイ、アナゴ、ハマギギ、ギンイソイワシ、マゴチ等が確認された。特記すべきは東シナ海に生息し、現在の有明海では見られないホンニベの耳石(平均して23.7mm)が全体の層準から見られる。それらは並はずれて大きく推定総体長が1mを上回る魚体で選択的に捕獲していたと考えられる。動物考古学的意義：特徴的な形状を持つ部位から、魚類の科・属・種を同定することは容易であるが、一般的には部位が同定できても、同じ属種の他の魚種と酷似することが多く、属や種の判別に困難が伴う。東名遺跡遺跡では、埋没環境に恵まれ、耳石が大量に保存されていたため、現生魚種の耳石試料(体長・重量を含む)との比較が可能となり、魚種とその体長・年齢だけでなく生態から漁労活動の手がかりも得ることができた。一例として、現在の有明海には生息しない大型のホンニベを捕獲できたのは、産卵期に河口付近に接岸した際の可能性が高いことがわかった。また、骨格部位から同定できた魚種と耳石から同定できた魚種とが異なることや、骨の部位の形態からボラ科と同定されていた個体が、耳石からメナダが多数を占めることがわかった。東名遺跡群の人々は、漁網錘、釣針、刺突具など漁労具を持たないが、遺物として残らない漁労技術を持っていたことがわかる。



三方五湖と周辺の遺跡群

BO1 魚類遺存体から見た小竹貝塚—2008 年度出土資料を中心として—

○納屋内高史（富山市教委）

The picture of Odake Shell Mound mainly studied from the fish remains excavated by the survey in fiscal 2008

Takashi NAYAUCHI

小竹貝塚は、富山県富山市呉羽町に所在する、縄文時代前期後半を中心とする集落遺跡である。これまでに、4 回の本調査を含めて複数回の発掘調査が行われている。特に 2010 年の富山県文化振興財団による調査では、厚さ 1.8m の貝層が検出されたほか、71 体に上る多量の人骨が出土し、様々な方面から注目を集めた。富山市教育委員会では、2008 年度より河川改修に伴う立会調査を行っており、2008 年度には 1.5m の貝層が検出されたほか、2 体の埋葬人骨が出土した。この立会調査時に出土した魚類遺存体を分析した結果、本地点では、クロダイ属、コイ科などの主に淡水から汽水域に生息する種が主体的を占め、サバやマグロなど、内湾域や外洋域に生息する種も一定量出土することが明らかとなった。これらの魚種は、当時遺跡の付近にまで広がっていた放生津潟とその周辺の水域から採取可能であったと考えられるものばかりであり、遺跡周辺の水域の魚類相を反映していると考えられる。この結果を本遺跡における 1991 年の調査及び 2010 年度調査出土資料の分析結果と比較することを通じて、本遺跡から検出された貝塚の姿に迫りたい。

BO2 小竹貝塚における動物資源利用

○山崎健（奈文研），丸山真史（京都市埋文），菊地大樹（京大人文研），江田真毅（北大），松崎哲也（京大），三輪みなみ（愛知県埋文）

The use of animal resources at Odake Shellmound

Takeshi YAMAZAKI, Masashi MARUYAMA, Hiroki KIKUCHI, Masaki EDA, Tetsuya MATSUZAKI, Minami MIWA

富山県小竹貝塚は、北陸新幹線建設に伴う発掘調査で、縄文時代前期中葉～末葉の①竪穴建物などの居住域、②埋蔵人骨などの墓域、③板敷遺構などの生産加工域、④貝層などの廃棄域が確認された。出土した動物遺存体は、縄文時代前期後半における日本海側の動物利用を明らかにするうえで、非常に貴重な資料群といえる。本発表では、この小竹貝塚から出土した動物遺存体の概要を報告する。合計で約 3 万点の脊椎動物遺存体を同定した。同定した分類群は、魚類 40 分類群、両生類 1 分類群、爬虫類 2 分類群、鳥類 19 分類群、哺乳類 28 分類群の合計 90 分類群である。魚類ではクロダイ属・スズキ属・コイ科、鳥類ではカモ亜科・カイツブリ科、哺乳類ではカワウソなど、遺跡至近に広がる汽水域～淡水域に生息する動物が多く出土していた。一方で、カマイルカやマイルカ属といったイルカ類を積極的に獲得していた。こうした生業活動は、小竹貝塚が営まれた前期中葉～末葉の間では基本的に変化していなかった。また、貝層土壌を水洗選別して回収した微細遺物の中から「縦に割れ裂いた竹笹類の稈に、漆を塗り重ねて鯛の歯を象嵌した製品の破片」が見つかった。これは同時期の鳥浜貝塚出土資料の理解にも貢献できる資料であるため、あわせて報告したい。

BO3 福井県内出土黒曜石の産地分析からみた縄文人の交換活動、行動領域

○建石徹（文化庁），小島秀彰（若狭三方縄文博），田中祐二（福井県庁）

Exchange activity and territorial range of Jomon people revealed through obsidian source analysis in Fukui Prefecture

Toru TATEISHI, Hideaki KOJIMA, Yuji TANAKA

福井県域における縄文時代遺跡出土黒曜石の産地分析結果を集成した。福井県域の先史時代諸遺跡における剥片石器石材の大半は安山岩（サヌカイトを含む）等であり、黒曜石は客体的な存在であるが、集成の結果、嶺北地域・嶺南地域ともに長野県産と隠岐産が主体を占めていることが理解された。この上で、今回あらたに若狭町北寺遺跡出土黒曜石（縄文時代中期～後期前半）の産地分析を実施し、長野県産とともに月山産が存在することを確認した。月山産黒曜石は、山形県内をはじめとする東北地方南部から新潟県北部の諸遺跡での出土が知られているが、新潟県南部以南（以西）における出土は知られていない。北寺遺跡の月山産黒曜石の事例は、この石材の面的な広がり範囲を大きく越えた遠隔地における「点としての存在」といえ、産地周辺（新潟県北部以北）からの、おそらく海路を経由した直接的な搬入が想定される。一般に縄文時代の黒曜石製石器・石材の移動は、産地からの直接採取や「埋め込み戦略」によるものでなく、ネットワークを介した（産地周辺との関係でいえば）間接的な移動とみられる事例が多いが、本例はこれと異なるパターンを示す。本演では、北寺遺跡で確認された月山産黒曜石のお話を皮切りに、福井県域及び京都府域・新潟県域等の日本海沿岸における諸事例を参照しながら、当該地域における縄文時代の黒曜石交換・行動領域のあり方を考察する。

BO4 鳥浜貝塚の発掘調査と動物考古学的研究への寄与—学史の整理から—

○小島秀彰（若狭三方縄文博）

The consideration of the excavation and study history of the Torihama shell midden and its contribution to the zooarchaeological study

Hideaki KOJIMA

福井県若狭町鳥浜に所在する鳥浜貝塚は、縄文時代前期を中心とする低湿地性貝塚である。1962年から1986年まで10次にわたって行われた発掘調査の結果、土器・石器・骨角器・木製品・漆製品・繊維製品のほか、多量の動植物遺体が出土した。その良好な保存状態から、当時「縄文のタイムカプセル」と評価された。日本における動物考古学的研究の歴史において、鳥浜貝塚の果たした役割は大きい。第1点として、1975年から学際的な調査体制を組み、自然科学各分野の研究者が発掘調査現場で試料の採取や出土状況を確認していた点である。記録保存のための緊急調査だったにも関わらず、長期的計画に基づいて発掘調査が実施され、「生業活動の復元」という統一研究テーマが掲げられていた。第2点として、低湿地性貝塚発掘調査方法の確立である。①鋼矢板による調査区の締め切りと水中ポンプによる24時間排水の実施②湧水を克服し低湿地遺跡ながら層位的な発掘調査を実現③土壌の取り上げと水洗選別による微小遺物の取り上げ、といった今日の調査の礎を築いた。第3点として、種同定に止まらない分析指標の採用である。これまでに稲波（1983）による獣骨の定性・定量的分析、姉崎・本郷（2002）によるイノシシの年齢査定と飼育可能性の検討、内山（2007）によるシカ・イノシシ部位別出現率からみた遺跡機能推定など、以後の動物考古学的研究のケーススタディとなり得るアプローチが試みられた。

CO1 土器胎土脂質分析を利用した動物性食材利用の評価

○宮田佳樹 (金沢大), 堀内晶子 (国際基督教大)

Evaluation of animal resources by lipid analysis in pottery

Yoshiki MIYATA, Akiko HORIUCHI

日本のような酸性土壌の地盤では、遺跡から直接食材推定につながるような動植物遺体が出土することよりも、土器が出土する方が一般的である。土器で調理を行うと、土器内面には調理された食材を起源とするコゲが付着し、土器外面には燃料材を起源とするススが付着し、土器胎土には食材を起源とする有機残渣が吸着するはずである。出土した土器から常に分析可能なコゲが入手できるわけではない。そこで、土器胎土に残存する有機物の起源物質を脂質分析によって推定することができるようになれば、直接動植物遺体が出土していない場合にも古食性を詳細に復元できるようになることが期待される。本研究では、さまざまな遺跡から出土した土器の脂質分析結果や脂肪酸レベル炭素同位体比測定結果を炭素年代測定、安定同位体測定結果とともに報告し、植物性食材と比較しながら、動物性食材利用の痕跡を土器残存有機物から評価してみる。資料提供者の方々とは協力頂いた Prof. Richard Evershed (Bristol Univ.) に感謝致します。本研究は H25-28 年度科研費基盤 B (代表者宮田佳樹; 25282072) の研究成果の一部である。

CO2 中世大友府内町遺跡出土の骨角製品一両歯櫛の系譜について一

○真貝理香 (奈文研), 松井章 (奈文研)

Bone comb recovered from the medieval town of Otomo-Funai-Machi: The genealogy of double-sided comb

Rika SHINKAI, Akira MATSUI

日本における櫛の歴史は、縄文時代早期の佐賀県東名遺跡群出土の木製組み合わせ櫛や、縄文時代前期の鳥浜貝塚の漆塗りの櫛にまでさかのぼり、弥生時代、古墳時代の出土例も少なくない。これまで櫛の研究は、主として形態、材質や製作技法、民俗事例的な観点から行われ、その対象となってきたのは、一方の辺に歯を持つ片歯の櫛である。今回紹介するのは、中世大友府内町遺跡より出土した両歯の櫛で、骨角製の板と共に細かな竹製の歯を挟み込んだ組み合わせ式の櫛である。中国には、竹や牛骨・牛角・象牙・黄楊などで中央の梁(篋梁・挺)を作り出し、その中に竹などの細かな歯を挟込み、歯の両脇に薄い骨板を入れるタイプの両歯の櫛が存在する。今回は、中国における両歯櫛の製作技法を紹介すると共に、大友府内町遺跡の両歯櫛が、その製作技法から中国に由来する可能性が高いことを示す。日本において、両歯の櫛が文献に多く現れるのは、江戸時代以降である。当時は、現在のように洗髪を頻繁に行なうことができず、櫛は髪をとかすという美容上の目的以外にも、フケや脂を取り除き、虱を駆除するための衛生用品という側面を持っていた。特に目の細かな両歯の櫛は、唐櫛(とうぐし)・梳櫛(すきぐし)とよばれ、その後日本においては主に1木から歯を削り出す形で製作され、広く使われていたことは、文献や浮世絵からも判明している。大陸から持ち込まれた両歯櫛が、後に日本でも形を変えつつ製作され、普及した系譜を追う。

CO3 オホーツク文化期の海獣骨における解体痕研究

○岩波連（北大）

Cut mark analysis of marine mammal bone in the Okhotsk culture

Ren IWANAMI

オホーツク文化期は石器と金属器の併用が指摘されている。遺跡からは大陸の諸文化や本州の古墳～平安文化から得られた金属器が墓坑の副葬品や住居址から多数出土している。しかし、その多くは実用品というよりも威信財としての性格が強い遺物が多い。オホーツク文化期は時代を経るにつれて石器製作の技術が衰退していくことが指摘されているなか、オホーツク文化期の道具の利用の実態は不明瞭な点がある。そこで礼文島香深井 1 遺跡において出土した海獣骨に残された解体痕を観察することで実際に使用された道具の復元を試みた。海獣骨は柔らかく、骨髓食にも向かないため多くが廃棄された当時の状況を良く残している。土器の種子圧痕に用いられているレプリカ法によって解体痕をシリコンに転写し、顕微鏡観察を行った。解体痕の断面は使用された道具によって断面の形状や角度に差異が見られた。これらの情報と出土した層位などを総合的に捉え、オホーツク文化期の道具の使用実態について検討を行う。

CO4 「鵜を抱く女」再考

○江田真毅（北大）・沖田絵麻（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）・鵜澤和宏（東亜大）

A reconsideration of “U-wo-daku-onna”, a shaman lady in the Yayoi Period

Masaki EDA, Ema OKITA, Kazuhiro UZAWA

「鵜を抱く女」は土井ヶ浜遺跡(山口県下関市豊北町・弥生時代)1号人骨の通称である。この壮年女性人骨は、胸部近傍から鳥の骨が検出されたことから、鳥を抱いて埋葬されたと考えられてきた。これらの鳥骨が「ウミウの雛」と同定されたことが、同人骨の通称の由来である。近年、江田らはこれらの鳥骨を形態学的観点から再検討し、ウ科の幼鳥とみなせる骨は含まれていないことを明らかにした。また、同定は保留したもののカモメ科、フクロウ科、タカ科にそれぞれ形態の近い骨を認めたことから、すべての鳥骨が1個体の鳥に由来しない可能性を指摘した。さらに鳥骨のうち3点に小動物と思われる咬痕が認められたことから、これらが人骨の埋葬と同時に副葬されたとする従来の説には疑問が残ることを指摘した。本研究では、鳥骨と1号人骨の保存状態を観察・対比し、埋葬後の骨変成の観点から人骨と鳥骨の同時埋葬の可能性について再検討した。1号人骨には、食肉類や齧歯類の食痕、風化・被熱による骨組織の崩落などとは異なる2タイプの特異な損傷が認められた。このうち1タイプは、昆虫による食痕として報告されたものと特徴が一致していたが、もう1タイプは管見の限り類例報告のないものであった。発表では、これらの損傷について報告するとともに、考古学的コンテキストや考古科学分析のデータなどを加味して、「鵜を抱く女」について再考する。

D01 臼歯形状からみた日本在来馬の起源

○植月学(山梨県博), 津村宏臣(同志社大), 孫峻鎬(高麗大),

Tuvshinjargal Tumurbaatar(モンゴル国立博), Bayarsaikhan Jamsranjav(モンゴル国立博), Erdene Myagmar(モンゴル国立大), Gundem Can Yumni(Batman大), 本郷一美(総研大)

The origin of Japanese native horses revealed through molar shape analysis

Manabu UETSUKI, Hiro'omi TSUMURA, Joonho SON, Tuvshinjargal TUMURBAATAR, BayarsaikhanJAMSRANJAV, Erdene MYAGMAR, Can Gundem YUMNI, Hitomi HONGO

本研究では日本列島および朝鮮半島、モンゴルで出土した馬の上顎第1後臼歯の形状をランドマーク法により比較した。日本列島では畿内、中部、関東、東北の古墳時代から中世の馬歯を比較した結果、いずれの地域においても古代の歯は多様性が低くまとまるのに対し、中世になると変異が大きくなることが確認できた。韓国の古代遺跡では南岸の伽耶の地域出土のものが日本の古代遺跡にもっとも近く、馬具型式から推測される馬産文化の系譜と調和する。やはり馬具の型式から関連が推測される百済に相当する東南部の遺跡出土のものは形状が異なり、日本の中世に近い。これは日本列島に導入された初期の馬の系統を考える上で示唆的である。次に、モンゴルの遺跡では匈奴時代の馬歯の形状が日本の古代に近いのに対し、中世では日本同様に変異が大きくなる傾向が確認できた。このことから、古代の日本列島にはモンゴルを起源とし、伽耶を経由した限られた系統のウマが導入されたものの、中世までにはより多様な馬が導入された可能性が考えられる。起源地であるモンゴル周辺でも中世までの他地域との交流の活発化により、より多様な馬が見られるようになった可能性もあるが、まだ分析数が少なく、今後資料数を増やす必要がある。

D02 東日本内陸部における遺跡出土馬の雑穀給餌形態の検証—方法論的検証とその対応—

○覚張隆史(北里大), 植月学(山梨県博), 前楚秀和(与那国町教委), 秋田優(串間市教委)

Evaluation of C4-feeding culture using horse remains in the eastern inland Honshu: Methodological research and application

Takashi GAKUHARI, Manabu UETSUKI, Kazuhide MAESO, Suguru AKITA

日本列島には、古くから家畜馬を飼育する文化が広く分布していたことが、遺跡出土馬の存在で確認されてきた。古墳時代から顕著に出現する家畜馬は、大陸から導入され、日本列島内の文化と融合しながら新たな飼育文化を形成していったと考えられている。一方で、馬の飼育形態に関連する研究は、遺跡にある厩舎跡などに基づいて理論構築を図るものの、馬自体の生態情報に基づいた馬飼育システムの復元までには至っていない。近年、安定同位体比を指標とした動物の生態復元が積極的に行われている。遺跡出土動物遺存体を用いた研究は、絶滅危惧動物の生態や家畜化の画期をとらえる上で、強力なツールとなりつつある。特に、哺乳類の歯エナメル質の炭素同位体比は、その個体が摂取した全食物の炭素同位体比と強い相関関係を示すため、高精度の食性復元が可能である。そこで本研究は、生態が既知である日本在来馬の安定同位体分析に基づいて家畜馬の生態復元を試み、方法論的検討を行った。さらに、本研究で得られた手法を遺跡出土馬に適用し、古墳時代における馬飼育システムを評価した。その結果、東日本内陸部の古墳時代における馬は、0歳~2・3歳まではC3植物に依存し、3歳以降はC4植物をより多く摂取する傾向をもつ個体が検出された。この給餌変化は、古墳時代馬が半野生的な牧から、ヒトの摂取食物の影響が強い厩舎飼育へ変化したためと推察される。

D03 宮古島友利元島遺跡出土のイノシシについて

○菅原広史（浦添市教委），久貝弥嗣（宮古島市教委）

Examination of *Sus scrofa* excavated from Tomori-motojima site in Miyako Island

Hiroshi SUGAWARA, Mitugu KUGAI

本発表では、宮古島城辺に所在する友利元島遺跡の平成 24 年度の宮古島市教育委員会による発掘調査において、無土器期に比定される層位から出土した脊椎動物遺体の種同定による分類群組成の分析および観察などに基づき、遺跡及び宮古島の先史時代における脊椎動物利用相について考察を述べる。出土した脊椎動物遺体を同定したところ、資料の大半は上下顎骨・椎骨・四肢骨など概ね全身の部位を含むイノシシ骨により構成されることを示す結果が得られた。一部に魚骨が含まれるものの、友利元島遺跡における動物利用がイノシシを主体とした事を示したものとと言える。琉球列島の脊椎動物遺体の分類群組成は主に魚類が優占群となる事例が多く、宮古島の無土器期の遺跡においても同様の傾向が窺えることから、一般的に漁撈を中心とする生業活動が展開されていたと理解される。その中であって、友利元島遺跡は眼前を海に面した砂丘上に立地するという状況下でありながらイノシシが優占する出土様相は、これまでと異なる傾向を示唆するものである。また、四肢骨を中心に人為的な破砕によると思われる痕跡が比較的高い頻度で観察されており、本遺跡に特徴的な点であると考えられる。これらのことから友利元島遺跡の脊椎動物遺体は、宮古島の無土器期におけるイノシシを対象とする狩猟あるいは飼育の可能性を含む生業形態を検討する上で重要な意義を有するものと位置づけられる。

D04 現生リュウキュウイノシシの DNA 解析：遺跡出土資料の解析結果を正しく解釈するために

○高橋遼平（山梨大）・姉崎智子（群馬県博）・本郷一美（総研大）・黒澤弥悦（東農大）

DNA analysis of modern Ryukyu wild boar: for correct interpretation of analysis results of archaeological samples

Ryohei TAKAHASHI, Tomoko ANEZAKI, Yaetsu KUROSAWA, Hitomi HONGO

これまでに行った、琉球列島の先史遺跡から出土したイノシシ・家畜ブタ(*Sus scrofa*)の骨を用いた古代 DNA 解析では、野生のリュウキュウイノシシ(*S. s. riukiuanus*)とは異なる遺伝的特徴を持つ個体が複数確認されている。この解析結果から、先史時代の琉球列島では1)外部からのイノシシ・家畜ブタ導入が既に生じていた、2)複数の野生イノシシ系統が生息していた、という2 仮説が推察された。これらの仮説の検証には、リュウキュウイノシシの DNA 情報が必要不可欠であるが、未だに解析された資料は少ない。本研究ではその遺伝的変異幅や起源を探る事を目的に、現生リュウキュウイノシシについて資料数と採集地域を増やし、分子系統解析を行った。

PO1 遺跡出土クリの栽培化の問題

○新美倫子（名大），西本豊弘（噴火湾文化研），住田雅和（トータルメディア），金憲爽（歴博）

The problem of cultivation of Japanese chestnut (*Castanea crenata*) excavated from Jomon sites

Michiko NIIMI, Toyohiro NISHIMOTO, Masakazu SUMIDA, Honsoku KIM

縄文時代人にとってクリが重要な食料だったことはすでに明らかであり、遺跡の人々が利用したクリが「野生のものか、栽培されたものか」という問題はずっと議論されてきた。この問題を検討するため、発表者は愛知県・岐阜県で野生クリの採集調査を実施し、採集したクリの計測結果から、縄文晩期には出土クリが野生クリの変異幅を超えて大型化し、栽培が行われていたと結論づけた。しかし、野生植物の栽培化の過程における人から植物へのさまざまな働きかけについて考えると、クリの栽培化でも「選抜・交配等により果実を大型化すること」だけでなく、「クリの木に肥料を与える等の管理」も行われたはずである。この「施肥管理」に着目すると、植物の窒素安定同位体比は根から吸収する窒素源の同位体比を反映し、特に動物性の有機肥料を与えるとその値は大きくなることが知られている。そこで、クリ果皮の窒素安定同位体比から施肥管理が行われていたか否か、またどの程度行われていたか等の状況を把握する方法を考えてみたい。

PO2 土器付着炭化物を中心とした鳥浜貝塚の年代学的研究

○遠部慎（北大），宮田佳樹（金沢大）

Radiocarbon dating of Jomon pottery from the Torihama Shell Midden site, Fukui Prefecture: mainly carbonized material adhering to pottery

Shin ONBE, Yoshiki Miyata

福井県鳥浜貝塚はいわゆる学際的な研究が実施された遺跡として名高い。また年代に関するセッションや、報告書などで数多くの年代が知られ、今日でも重要な測定値として評価される。それらを支えているのが精密な調査と層位と型式学的研究である。本研究では、ある程度型式判定が明らかな土器群を中心に年代測定を実施することで、北陸地方の縄文時代前半期の年代値を構築する。ここでは、多縄文系土器、押型文土器、北白川下層式土器などの有効な測定値が得られたので報告する。

PO3 東北地方における縄文時代前中期の貝類利用とその変遷

○松崎哲也（京大）

Compositional change of shells in the first half of Jomon period in Tohoku Region

Tetsuya Matsuzaki

縄文時代の東北地方には貝塚の密集する地域が多数存在し、それらの分布密度や貝類の構成種は地域・時期によって一様ではない。本発表では、主に東北地方の太平洋沿岸を対象として、海岸線が大きく変化したとされる縄文時代早期から中期に形成された貝塚の貝類組成および海水準変動の様相から、貝類の変遷過程を広域的に検討することを目的とする。貝類組成の変化は対象域すべてにおいて認められ、とくに早期末前後と中期には共通して変化が生じている。早期末は海水準上昇のピークであり、古石巻湾、古小川原湾、古八戸湾といった内湾的環境が各地に形成され、現在の内陸奥部に鹹度の高い貝塚が形成された。一方、中期は海水準低下期にあたり、主体貝が徐々に海水種から汽水種、さらに仙台平野では淡水種へと変化する様相が見てとれる。また、北上川流域などでは前期の海水準安定期にも組成の変化が生じており、要因として内湾の堆積による干潟、陸域の拡大が想定される。なお、三陸海岸では中期以降に大船渡湾でアサリなどの内湾砂底群集が増加するが、他の地域のような大きな変化は見られない。したがって、当該地域における貝類組成は基本的に海水準変動と対応しているが、海水準の安定期にあっても沖積作用によって変化が生じる場合があり、同一の環境区分に含まれる地域ごとに詳細に検討する必要がある。

PO4 縄文時代におけるマグロ属の利用—岩手県宮野貝塚出土資料の検討—

○吉田彩乃（慶大）、佐藤孝雄（慶大）

Utilization of *Thunnus* in the Jomon period: With a special reference to the remains unearthed from the Miyano Shell Mound in Iwate Prefecture

Ayano YOSHIDA, Takao SATO

宮野貝塚は岩手県大船渡市三陸町綾里地区、現海岸線から1kmほど内陸に位置する。本貝塚は、縄文時代前期(約 5500 年前)から弥生時代初期(約 2000 年前)までの長期に亘る居住の痕跡が確認されており、良好な縄文人骨が出土したことで知られる。慶應義塾大学民族学考古学研究室には、同貝塚から出土した動物遺体群の一部が未報告のまま所蔵されている。東日本大震災により、現地に保管されていた資料の大半が被災してしまった状況下、それらを分析・報告する意義は大きい。同定の結果、貝類 6 種類、魚類 11 種類、鳥類 2 種類、哺乳類 3 種類からなる計 22 種類の遺体が含まれていることを確認することができたが、同資料群には肉眼での任意採集によるサンプリングバイアスが生じている可能性を考慮する必要がある。もっとも、このほか多出したマグロの椎骨に関しては、そうしたバイアスも比較的小さいと考えられる。部位組成の復元および解体痕の観察も試みた結果、第一腹椎から尾部棒状骨までの椎骨が、本来一体分当たりに伴う数量比に近い割合で出土しており、一部の資料にカットマークも観察することができた。こうした同定・観察結果からは、遺跡内にマグロの全身部位が持ちこまれ、解体に際し尾部を切断する行程が含まれていたことが窺えよう。

PO5 mtDNA 分析を用いた勝連城跡出土魚骨の種同定の実践と生業様相の考察

○菅原広史（浦添市教委），川口亮（琉大）

Identification of fish bones excavated from Katuren-Gusuku by mtDNA analysis and examination of fishery aspect in Nakagusuku Bay

Hiroshi SUGAWARA, Akira KAWAGUCHI

本発表は、沖縄県うるま市に所在する勝連城跡四の曲輪から出土したフェフキダイ属魚骨について mtDNA 分析を用いた種同定分析の成果を示すとともに、同定結果に基き中城湾域における漁撈活動の様相について考察するものである。分析では上記の遺跡から出土した魚骨のうち、現生標本との形態比較によりフェフキダイ属に同定された前上顎骨を用いて実験したところ、いずれからもDNAを抽出することに成功した。そこから、フェフキダイ科魚骨に特異的なプライマーを複数作成し、塩基配列を決定した。また、これを複数回繰り返すことでコンタミネーションのチェックを行った。これらにより得られた塩基配列は現生ハマフエフキの配列と概ね一致することから、これらの資料がハマフエフキに同定できるものと結論付けられる。分析対象資料の骨形態について詳細に比較すると、歯列形状などに僅かな差異が認められるものの、個体差間の変異の幅であると考えられる。このことから上記の遺跡出土資料に含まれるフェフキダイ属の多くがハマフエフキである可能性が高いと考えられる。勝連城跡を含む中城湾岸に立地する遺跡から出土する魚骨組成はフェフキダイ科に同定される分類群がもっとも優占される。これらの分類群に含まれる多くがハマフエフキという単一の種で構成される可能性が窺われる。中城湾において漁撈活動を営んだ人々の意識がハマフエフキに対して集約していたことを示唆するものであろう。

PO6 富山城下町遺跡主要部（西町南区）出土の動物遺存体

○納屋内高史（富山市教委）

Animal remains excavated from the principal part of Toyama Castle town site (Nishi-cho south point)

Takashi NAYAUCHI

富山城下町遺跡主張部は、現在の富山市中心部に所在する、近世の城下町遺跡である。寛文元年(1661)から富山城とともに本格整備された城下町であり、白のほか、城下町一帯も川や堀、土居などで囲む惣構形式の城下町である。2013 年度、本遺跡の西端部分にあたる西町南地点の発掘調査が行われた。絵図などによれば、調査地点は北陸街道に面した町屋であり、乾物や八百物を取り扱う商家であった。発掘調査の結果、井戸や溝の埋土から、多量の木製品や木簡、陶磁器類と共に多量の動物遺存体が出土した。出土した動物遺存体は、シジミ類が最も多く、以下、マダイ亜科を含むタイ科、アジ類、タラ科と続く。本発表では、出土した動物遺存体の概要を述べると共に、近世富山城下町における商家の生活を考えたい。

PO7 近世、金沢の動物遺体とその現状

○畑山智史（埼玉大）、中村大介（埼玉大）

Review of faunal remains from the pre-modern of Kanazawa

Satoshi HATAKEYAMA, Daisuke NAKAMURA

金沢には、近世の生活を示す文献史料が豊富に存在する。その中には、代々前田家に仕えた料理人・舟木伝内の料理書もあり、当時の食文化について、文献史料からの復元が試みられている。考古学においては、近世遺跡の発掘調査は、ここ数年注目されているものの、積極的とはいえない。また、遺構や土器など遺物が研究の主流であるため、食生活を反映する動物遺体についての報告は多くない。幸いなことに東京大学本郷キャンパス内には、加賀藩の江戸藩邸が埋蔵され、食文化復元の資料となる骨や貝殻等の出土が現在も報告されており、近世金沢の一端を知ることができる。だが、その国元である金沢では近世遺跡の発掘調査は実施されているが、骨や貝殻等は未報告が多い。文献史学や江戸藩邸の発掘成果との比較・検討はなされていなかった。そこで、近世の金沢を調査した石川県埋蔵文化財センター、金沢市埋蔵文化財センター、金沢城研究所、金沢大学埋蔵文化財調査センターの刊行物を基に、動物遺体の現状を調査した。分析会社の参入する2000年以降は、微小な自然遺物についても同定されているものの、それ以前については、僅かな記載に限られ、その様相は不明瞭であった。今回、未報告の資料の中で前田氏（長種系）屋敷跡と金沢城（県庁跡地）の資料について再整理できた。その結果、現在の市場では流通しない貝種があり、またイワガキなど江戸藩邸とは異なる貝種がみられることが明らかとなった。

PO8 縄文犬は何を食べていたか？

○覚張隆史（北里大・学振）・米田穰（東大）

“Jomon-Dog” ate what?

Takashi GAKUHARI, Minoru YONEDA

縄文時代遺跡からは多くのイヌが出土しており、これらの「縄文犬」はヒトと密接なかわりを持つ家畜犬であったと考えられている。一方、ヒトとイヌの密接な関わり合いを推察する根拠は、埋葬人骨とともに出土したという情報に依存しており、縄文時代から出土したイヌをこれらの前提で議論する機会が多い。しかし、その関わりあいの具体的な実像は今なお不明な点が多く、更なる探求が求められる。近年、骨コラーゲンの炭素・窒素安定同位体比に基づいて、イヌの食生態を復元し、ヒトとイヌの関係性を議論する研究が欧米を中心に蓄積されてきた。そこで、本発表では先行研究における欧米の炭素・窒素安定同位体分析の実情を総括し、縄文時代遺跡から出土するイヌと同定された集団の同位体比の特徴と比較することで、縄文犬の特異性について考察を試みた。その結果、縄文時代遺跡から出土するイヌは植物食傾向が強い個体から海産物資源を利用する個体が検出された。また、縄文犬は縄文人と類似した炭素・窒素安定同位体比を示す場合もあるが、一方で大きく異なる値を示す個体も同一遺跡中に数多く存在することが示された。この様に、縄文時代におけるヒトとイヌの関わりあいは、単純にヒトと食料を共有する「食」における相利共生関係だけでなく、個体ごとによって異なる関係性を有し、「食」に関連しない共生関係もしくは全く異なる関わりあいがあった可能性が推察された。

P09 モンゴルにおける青銅器時代のウマ儀礼について

○Battsengel TSOZOLMAA（名大）

The horse rituals of the Bronze Age in Mongolia

Battsengel TSOZOLMAA

動物と深い関係を持つ遊牧民の国であるモンゴルでは、遺跡からウマが多く出土する。ウマ遺体の出土状態には大きく2つのパターンがある。一つは人の埋葬に伴う副葬であり、もう一つはウマ儀礼(犠牲)に使用されたものである。ウマ儀礼は青銅器時代のみに見られ、「ヘレクスル」や「鹿石」と呼ばれる遺構で検出される。ヘレクスルは積石塚を方形あるいは円形の石列で囲った遺構であり、主に積石塚の東側に石堆が複数置かれ、さらにその外側には全体を囲む形でストーンサークルが配置されることもある。この石堆からウマ遺体が出土することが多い。鹿石は多くの場合、鹿の紋様がきざまれた立石で、その周辺には直径2～3メートルの石堆が配置され、そこからウマ遺体が出土する。本研究では、モンゴルの青銅器時代遺跡に見られるこれらのウマ儀礼について検討し、その結果を文献史料やウマに関する習慣と比較してみたい。

P10 鯨ひげ細工とべっ甲細工の類似性についての一考察

○内田昌宏（富士市立富士第一小）

The study value of the use of whalebone and tortoise-shell

Masahiro UCHIDA

鯨ひげは、古くから裁断されたり、加工されたりしながら生活用品や武具、工芸品などとして使用されてきた。その利用例については、第1回の本学会ポスターセッションにおいて報告した。現在、捕鯨をめぐる国際情勢や生活様式、趣向の変化などを要因に、鯨ひげ細工の存在感が薄れるとともに、その加工技術の継承が危ぶまれている。同様に、伝統的な鼈甲細工についても資源の枯渇や国際的な資源管理を背景にして、身近な物でなくなりつつあり、鼈甲細工の存続やその技術の伝承に課題を抱えている。また、鯨ひげ細工も鼈甲細工も加工工程で熱処理をとまらう。製品に代表される曲げ物においても、古来から熱処理技術が細々と伝承されてきているが、鯨ひげ細工と鼈甲細工はともに独特なものである。今回の発表では、国内で数少なくなった両細工の製作取材をもとに、その類似性や相違性などについて検討することにした。

「動物考古学」32号 原稿募集に関するお知らせ

「動物考古学」32号に掲載する原稿を募集します。

■刊行予定：2015年 3月末

■締め切り：2014年12月15日

■募集原稿種目

論文：未発表の新しい資料・知見をまとめたもので結論の明確なもの、または特定の主題について
研究史・これまでの研究成果・展望などを総覧したもの

研究ノート：論文に準ずるもので、研究の中間報告や速報性を要するもの

調査報告：考古学、民俗・民族学、生物学などの調査の成果報告

資料紹介：重要資料の紹介

雑録：書評、関連学会の報告や紹介、国際情勢の動向など

詳細については学会公式ホームページに掲載されている投稿規定、執筆要領をご確認ください。

<http://www.flet.keio.ac.jp/~sato/Zooarch/top.html>

「動物考古学」編集委員会

植月 学、江田真毅、小野林太郎、小島秀彰、
建石 徹、津村宏臣、丸山真史

<お問合せ・原稿送付先>

日本動物考古学会事務局：
〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
慶應義塾大学 文学部 佐藤孝雄研究室
TEL：03-5427-1425
E-mail：js.zooarch@gmail.com

日本動物考古学会第2回大会

プログラム・抄録集

発行：2014年11月25日

発行元：日本動物考古学会第2回大会事務局

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学 文学部 佐藤孝雄研究室

印刷：Kinko's 田町店

〒108-001 東京都港区芝 5-29-14

田町日エビル 1F

